

OKADA-ROOM Vol.20

あ 或る洋画家の横顔Ⅱ ―写真からみる画家たちのつながり―

会期 2021年3月13日（土）～8月15日（日） ※会期中に展示替えを行います

佐賀県立美術館は開館以来、明治から昭和初期にかけて活躍した佐賀県出身の日本近代洋画の巨匠、岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ、1869～1939）の画業と人物を顕彰してきました。

今回は、岡田三郎助と写真をテーマとした展示の第二弾として「画家同士のつながり」に焦点をあて、岡田三郎助と関連画家の名品を写真資料とともに紹介します。明治30（1897）年に洋画留学のため渡欧した岡田三郎助は、当地で多くの作品を描きながら現地の様子や自身の姿をカメラにおさめました。当時の写真には、岡田に先駆けてヨーロッパで学んだ洋画家である黒田清輝や久米桂一郎の姿もみえます。彼らは洋画団体「白馬会」を立ち上げ、後に日本洋画壇の中心的な存在として活躍することとなるのです。

さらに、岡田が女性を対象に開設した私塾「女子洋画研究所」をとらえた写真は、教育者としての岡田の側面を伝える貴重な史料ともなっています。

本展では、岡田の名品や当時を物語る写真資料とともに、黒田や久米、小代為重しょうだいためしげ、そして岡田に学び後に女性画家として活躍した有馬さとえの作品を展示します。写真や作品から垣間見える画家たちの交流に思いを馳せながらお楽しみください。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
1	なかのたつ 中野多津像	Portrait of Tatsu Nakano, Okada's Cousin	岡田三郎助	1893（明治26）頃	85.0×54.8	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）

長崎県・神奈川県の知事を務めた岡田の叔父、中野健明なかのたけあきの娘・多津を描いた作品。健明は洋画家を志していた若き岡田の良き相談相手であり、岡田と家族ぐるみでの付き合いがあったようである。当時の岡田は画塾で修行中であり、色彩も暗くまだ筆運びに生硬さは見られるものの、澄ました中にあどけなさの残る少女の表情を、縁者ならではの親しみをもって誠実に描き取っている。

2	西洋婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1900（明治33）	45.4×37.9	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-------	---------------------	-------	------------	-----------	----------	----

本作は留学3年目に描かれたもので、同構図の作品が東京藝術大学大学美術館に所蔵されている。草木を背にした女性の肌や白い服には、木漏れ日が明るく映えている。岡田は留学期に、手紙の中で「緑の色、草と木の遠近色」や「人間の毛と顔の中の黄色」を戸外で描くことの難しさに触れ、「色の見分の稽古」をしていると述べている。岡田はコランのもとで、現地の美術に触れると共に、光の下で微妙に変化する色をよく観察するということも学んだのであった。

3	フローレンス風景	Landscape of Florence	岡田三郎助	1930（昭和5）	22.0×28.1	顔料・絹・板	館蔵
---	----------	-----------------------	-------	-----------	-----------	--------	----

二度目のヨーロッパの旅の途上、イタリアのフィレンツェ（フローレンス）で描かれた作品。旅に同行した画家、大橋了介の回想によると、岡田はアルノ川に面したホテルの窓から、現在も観光地として名高いこのヴェッキオ橋をスケッチしたという。建物同士の重なるの描写やカラフルな色彩が際立ち、軽やかかつ装飾的な画面に仕上がっている。フィレンツェの街並みのリズムの面白さに、岡田は惹かれたようだ。このスケッチをもとに帰国後描いたのが本作であろう。絹本の上に顔料で描いた珍しい作例。

※前期（3月13日～5月30日）のみ展示

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
4	裸婦	Nude	岡田三郎助	1935（昭和10）	99.8×65.5	油彩・カンヴァス	館蔵

1935（昭和10）年の第二部会展に出品された作品で、岡田円熟期の傑作である。当時の新聞記事では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったようだ。

展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。

【佐賀県重要文化財】 ※前期（3月13日～5月30日）のみ展示

5	薔薇	Roses	岡田三郎助	1931（昭和6）	45.5×37.9	油彩・カンヴァス	館蔵
---	----	-------	-------	-----------	-----------	----------	----

薔薇は岡田が特に好んだ題材で、多く描いている。本作はその中でも、飽くことなく眺めていたくなるような深みと親しみやすさをそなえた、味わい深い一枚である。

額縁は《丹霞郷》と同じく、裂をあしらい、外枠に漆を塗った凝った作りで、岡田自身による見立てである。岡田は裂や着物の収集家であったが、額に古裂を用いて作品と組み合わせ、その調和を楽しむこともあった。

※前期（3月13日～5月30日）のみ展示

6	小代為重像	Portrait of Tameshige Syodai	黒田清輝	1897（明治30）	25.3×18.0	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-------	------------------------------	------	------------	-----------	----------	----

右下に「明治三十年六月六日箱根湯本萬翠楼ニテ寫ス 黒田清輝」とある。像主の小代為重は、黒田と同年代の佐賀出身の洋画家で、岡田の先輩格の画家でもある。

黒田は1897（明治30）年、小代や久米桂一郎ら白馬会の仲間と箱根へ旅をしており、本作はこの旅の途上で描かれたものであろう。黒田は小代より5歳年下であるが、白馬会を創設した仲間同士、気心の知れた間柄だった。スケッチ的な作品だが、闊達なタッチでこの友人の風貌をとらえている。

黒田 清輝（くろだ・せいぎ、1866～1924）

「今まで脂（やに）っぽい暗い繪の中にあつた私は、黒田師に接して急に明るみに出たやうな気がして來た。」（岡田三郎助「平凡なる私の修業時代」）

1889（明治27）年、岡田は黒田清輝を知り、彼や久米桂一郎を通じて外光表現を積極的に受け入れていく。

黒田は1884（明治17）年に法律を学ぶためフランスに渡るも、画家になることを決意。帰国後は白馬会や東京美術学校で主導的な役割を担いながら、外光表現やヨーロッパの伝統的な絵画観の導入に務めた。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法(本紙・cm)	材質	所蔵
7	残曛(下絵)	Twilight (Study)	久米桂一郎	1898 (明治 31)	36.5×45.5	油彩・ カンヴァス	館蔵

1900(明治33)年に開催されたパリ万国博覧会の出品作品《残曛》(岩崎美術館蔵)の下絵である。「残曛」とは夕刻の残照のことで、空の複雑なグラデーション、鈍い金色に染まる草原や黄昏時の柔らかな空気の調子が細やかな筆致で表現されている。彼を含めた白馬会の主要な画家たちのフランス留学時代の師であり、外光の表現を得意としたラファエル・コランの影響をよく受け継いでいる作品。

久米桂一郎(くめ・けいいちろう、1866~1934)

佐賀に生まれる。父は歴史学者の久米邦武。岡田三郎助とは母方の遠縁にあたり、生家ははず向かいであった。1886(明治19)年に渡仏し、ラファエル・コラン門下に入り黒田清輝を知る。帰国後は黒田と画塾を開き、白馬会結成に携わった。岡田と帰国後間もない黒田を引き合わせたのは久米であり、岡田の画風の一大転換は彼によってもたらされたといえる。東京美術学校の西洋画科では、解剖学や西洋考古学などの授業を担当。その後画作からは遠ざかり、美術教育者として活躍した。

8	郊外風景	Landscape of Suburb	小代為重	昭和初頃	25.3×18.0	31.9×40.9	館蔵
---	------	------------------------	------	------	-----------	-----------	----

当時暮らしていた東京都二子玉川の近所の風景を描いたのであろう。筆致は速く、その場の空気を感じながら描いた雰囲気がよく伝わってくる。後年は本業の機械工学に打ち込むなど、画壇からは遠ざかった小代だが、白馬会で磨いた色彩感覚と創作意欲は衰えることはなく、本作のように身の回りの風景を滋味深くとらえた佳作を残した。

小代 為重(しょうだい・ためしげ、1861-1951)

佐賀市に生まれる。旧姓は中野で、岡田三郎助の母方の遠縁にあたる。千葉師範学校の教員を務めながら、百武兼行(ひゃくたけ・かねゆき)から油彩を学び、1885(明治18)年からは工部大学校(現在の東京大学工学部)で建築装飾を教える。油彩画を学ぼうと決心した少年時代の岡田にとってよき相談相手だったようで、曾山幸彦(そやま・さちひこ)の画塾を紹介するなどの助言をしている。

明治美術会や白馬会創設に携わるなど洋画家としても活躍したが、本来は機械工学の専門家を自認しており、東京電信学校では機械製図の助教授を務めた。

9	朝	Morning	有馬さとえ	1957 (昭和 32)	90.5×72.5	油彩・ カンヴァス	館蔵
---	---	---------	-------	-----------------	-----------	--------------	----

この頃、有馬は長く療養を余儀なくされていたせいも、背景は重い色で統一され、荒々しい筆致のアサガオからは不穏さが漂う。しかし、遠くを見据える女性の表情には気高さも感じる。有馬は本作のような芯の強さを感じさせる女性像を多く描いたが、女であるがゆえの苦勞のなか画家としての道を切り拓こうとする、自身の信念を重ね合わせていたのかもしれない。

有馬さとえ(ありま・さとえ、1893-1978)

鹿児島市に生まれる。本名サト。子どもの頃から西洋画に憧れ、三宅克己の水彩画の絵ハガキを集めたという。18歳頃に上京して岡田三郎助の弟子となり、のち岡田の本郷洋画研究所で学ぶ。1926(大正15)年、第7回帝展に《花壺》を出品、女性画家では初めての特選を受賞。日高文子や牧野虎雄の影響も受け、ダイナミックな筆致で女性像や静物を描いた。

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1-15-23
TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail:hakubi@pref.saga.lg.jp Web. http://saga-museum.jp/museum/